人たちの

上

ソニーOBたちが選んだ「独立の道」

団塊世代が定年退職を迎えるときが間近に迫っている。その数300万ともいわれ、多くの人が「定年後も、仕事を持ち続けたい」と願っているという。かつて〝働きバチ〟〝企業戦士〟と呼ばれた世代に今、第二のチャレンジの時が訪れた。

ジャーナリスト・山田厚俊

サクセス社を立ち上げたエンジニアたち。前列中央が加藤さん。後列左から2人目が遠藤さん

週1回、倉庫の一角にある事務所で行われる会議

日本の工業立国を支えてきた製品の一つに、半導体がある。かつて〝産業のコメ〟と呼ばれたのは鉄だったが、その鉄に取って代わったのが半導体だった。

IC、LSIと呼ばれる電子回路などで、電化製品にのみならず、自動車から住宅まであらゆる工業製品に組み込まれている。いわば〝心臓〟にあたるものである。また、製品の小型・軽量化、多機能化のために半導体は欠かすことができないのだ。

その半導体に「職業人としての半生」をかけた男たちが、定年後もその専門知識を武器に、新たな会社を立ち上げた。

神奈川県海老名市。

相模川にほど近い工業団地の一角にある倉庫の一室に設けられた小さな事務所が「サクセスインターナショナル」の拠点である。

毎週木曜日の午前中、ラフな格好の男たちが事務所に集まる。ほとんどが60歳を過ぎているが、見た目はとても若々しい。

「A社の問題については、私が見てきたよ。解決するメドがついた」

「B社の件は、かつて部下だった○○くんが詳しいと思う。今週中に彼に連絡を取りますよ」

ざっくばらんに弾む会話は、通称「進捗会議」と呼ばれるサクセス社の会議。普段はメールで連絡を取り合い、各自で受け持ちの仕事をこなす。会社に顔を出すのは週に1回のみ。そこで細部の確認などを行っている。

「午前中、2時間半ほどで会議は終わりますが、そのうちの3分の1ほどは横道にそれた話になってしまいます。普通の企業では信じられない無駄話ですが、こ

シニア起業挑戦

短期集中連載

台湾での打ち合わせ（上）や中国への出張（下）など、海外での技術指導も積極的に行っている

うやって顔を合わして話すのも、年寄りの楽しみかもしれませんね」

こう言って笑うのは、サクセス社の社長を務める加藤俊夫さん（68）。

加藤さんはソニーの半導体部門のOBで、サクセス社のメンバーはほとんどがソニーの半導体部門である厚木工場で働いていた人たちだ。

ソニーの厚木工場は1960年に約5万坪の土地にできた半導体専門の工場。トランジスタラジオやテレビといったソニーの主力製品の要を担ってきた工場といえる。加藤さんたちは、そこで人生の大半を送り、〝卒業〟した。

「定年後は週に2～3回、夫婦でゴルフをするなど、悠々自適の老後生活を送っている仲間もいますが、私は、もっと仕事がしたかったんです」

こう考えた加藤さんは95年、定年前に会社を辞め、半導体のコンサルタント業を一人で始めた。しかし、転機はひょんなところから始まった。それはOBたちの〝飲み会〟だった。

飲み会から始まった会社おこし

「7～8年前からかな、年に3～4回、集まるようになったのは……」

きっかけは、コンサルタントの一人が韓国の企業を担当していたが、ある時、急に外されたこと。技術は確かであっても、営業の術があるわけでもなければ、交渉のテクニックに長けているわけでもなかった高齢の個人コンサルタントは、その場で職を失い、途方に暮れた。その話を聞いた加藤さんは、以前から考えていたOBの〝飲み会〟を企画したのだという。

「一人でコンサルタントをするというのは、楽しくもあったが、何か困ったことがあった時に相談する相手がいない。会社では、嫌な上司だと思っても、やはり上司というものはありがたいものだと思いましたね。それなら、相談できる場があればいいと思い、上司だった川名喜之さん（73）とともに皆に呼びかけて始めたのです」

最初は僅かな息抜きかもしれなかったが、同じ境遇の仲間が集まる楽しいOB会となっていった。やがて加藤さんの部下だった遠藤勝彦さん（62）も参加するようになる。

ソニーにいた時、パワー素子の開発や混合型ICの設計、生産技術企画などに携わってきた遠藤さんは、50歳過ぎから退職後の人生の設計を考え始め、コンサルタントで身を立てようと考えていた。

ところが、経営に関する勉強を始め55歳の時、外部の会社への出向を命ぜられた。本部長待遇ではあったが、その時〝ショッキングな出来事〟が、遠藤さんに起きた。

「ソニーでは、パソコンを93年から導入しました。しかし、企画書や稟議書といった書類は、私が手書きで書いたものを部下に打ってもらっていたので、パソコンといっても単なるワープロ代わりでしかなかった。

私にとっては、どうしても必要なものではなかったのです」

「世界標準」を常に意識していまから老後に備えよ

長寿社会文化協会理事長 升田忠昭氏

今年、米国で3500万人以上が加入しているAARP（元全米退職者協会）が、大変興味深い調査を行いました。「シニアライフの国別比較」と題するもので、米国、英国、ドイツ、フランス、そして日本など先進10カ国の30～65歳までの男女計4000人に聞き取り調査したものです。

報告書は数十項目、100ページ以上にも及んでいますが、その中で四つのテーマに着目し、分析しました。そのテーマは「環境」「経済」「仕事」「健康」です。たとえば、老後に対して10カ国平均は57％が楽観的で、39％が悲観的なのに対し、日本は楽観的が68％、悲観的が31％。一方、老後の資金については安心が10カ国平均が54％、不安が43％なのに対し、日本は安心41％、不安57％と10カ国中、イタリアとともに最も高い割合を示しました。

また、退職後の仕事については、日本はパートタイムを望む声が28％と圧倒的で、ボランティア活動への参加を希望する声は8％にとどまりました。健康に関して良好と答えた人は59％、不良と答えた人は40％にも達しました。10カ国平均は良好が80％、不良が20％となっています。

以上のようなデータから分かることは、日本人は高齢化問題に対する関心度が

ところが、出向先でパソコンを使えない遠藤さんの姿を見て、新しい部下は、

「そんなこともできないんですか」と驚いたらしい。あれほど技術に関する好奇心と探究心が旺盛だった自分が、目の前にある機械を使いこなせないことに無性に腹が立った。と同時に、真顔で驚く社員もいる現実に、遠藤さんのプライドはもろくも崩れた。

「独立しよう」

遠藤さんの決意は固まり、00年に早期退職した。

加藤さん、川名さんたちが始めた飲み会にはソニーのOBが集まり、情報交換や愚痴をこぼす場となっていった。そこへ半導体事業の会社を興したOBの一人から、

「台湾や韓国の技術の面倒を見てくれないか」

という相談が飛び込んできた。いまや半導体の生産拠点は、中国、台湾、韓国などの東アジアが中心だ。しかし、技術力では日本がはるかに上回るものを持っている。よりよい製品を確保するためには、日本からの技術指導が不可欠なのである。

「一人だけでできる仕事ではない」

そう考えた加藤さんは、

「それなら、みんなで会社組織を作って、皆のネットワークを生かしたやり方で始めよう」

と提案した。

セミナーで若い技術者相手に話す時は言葉に熱がこもる

″好奇心″こそがシニアを支える

「どうせやるんだったら、成功させようという意味で『サクセス』を入れたい」（遠藤さん）

「世界的規模で仕事をしたいから、やはり『インターナショナル』と入れたい」（加藤さん）

といった意見が出され、社名は決まった。かくしてサクセス社は酒場の相談話から持ち上がり、01年2月に正式に起業された。

初代社長は最年長の川名さん、2代目は加藤さんが引き継ぎ、遠藤さんは取締役に就任した。メンバーはソニーのOBが次々に参加し、技術のエキスパートが計8人。さらに今年、営業のベテランも参加し、合計9人がそれぞれの専門分野で現役を続けている。

サクセス社の業務内容は、①技術コンサルティング②教育 ③開発・設計・支援の3本柱から成り立っている。いわば、半導体に関する″駆け込み寺″的企業である。顧客が困った際、サクセス社の経験と知恵で助けてもらうといった感じだ

比較的低く、社会保障制度に対する政府への信頼度も低い。経済面での不安を抱える人が多く、年金だけで維持できる生活レベルは低いと考えている。また、何らかの形で働き続けたいと考えている人たちが多い一方、ボランティア活動への関心は薄く、自分や家族の健康が心配事のトップであることも分かりました。

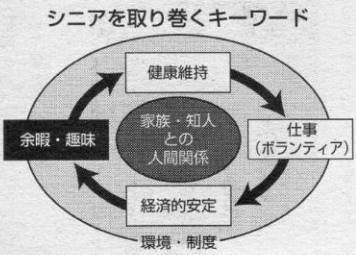
では、どうすべきか。

資産管理にしても、健康にしても、個人責任がより強く求められるでしょう。仕事に関しては、自分自身の価値観に基づいた人生設計がなければ、目先のお金目当てで「寂しい老後」になってしまいます。

冒頭の四つのテーマは、世界のシニア世代の関心事いわば「世界標準」です。世界各国は、これらの問題に積極的に取り組んできましたが、私はこの4テーマに「余暇・趣味」を加えた表を作りました。

一番の問題、関心は「健康」です。だから健康維持を上にし、その上で仕事があります。もちろん、その中にはボランティアも含まれます。健康で仕事もあれば、経済的な安定が望めます。さらに、シニアには、余暇や趣味がとても大事な要素になります。中心にあるのは、家族・知人との人間関係ですが、自分の人生を見つめ直したとき、人間関係こそが一番大切だと改めて思うでしょう。シニアになって、家族とともに、趣味や仕事を通じた友人との交流が、とても大切になってくるはずです。（談）

シニアを取り巻くキーワード



という。

「経験は基本だが、新しいことに挑戦しようという気持ちがなければ務まりません。技術は常に進歩するものですから。私は研修の最後にいつも受講生に『私の話の賞味期限は3年です。3年たてばその技術は陳腐化してしまいます』と言っているのです」

加藤さんは知的好奇心こそが企業を支える力であり、シニアが仕事に取り組む際に最も必要なことだと力説する。そこにはかつて日本の産業を支えたエンジニアとしての自信とプライドがのぞく。

一方、遠藤さんはシニアの自覚も必要だと、冷静に分析する。

「シニアが若い時に比べて弱くなりがちなのは体力と気力、そして金力です。特に体力は確実に衰えます。その最大の敵はストレス。無理せず、楽しく仕事をする、ストレスをためずに仕事をするのが一番です」

週1度の会議以外は自宅で仕事。遊びも仕事も自分のペースでできることに満足している。また、多彩な趣味も気ままにできる。遠藤さんはソニー時代からハワイアンバンドでスチールギターを担当しており、今でも〝現役〟だ。メンバーはやはり定年を迎え、時間の余裕ができたので数年前から、何十年ぶりに活動を再開した。

「最近は頻繁に集まらなくても練習できるので、便利ですよ」

各自が担当している楽器のパートを録音し、パソコンでメンバーに送る。それをミックスしたり、自分の担当の音を消すと、バンドのカラオケになり、自宅で一人で練習できるのだという。かつてパソコンは何もできないと言われた遠藤さんは、今ではパソコンのエキスパートである。

今後の夢について遠藤さんはこう語る。

「自分たちが培ってきた技術で社会貢献できれば、一番いいこと。そして、第二の出発をめざす大勢の後輩たちの基礎を固めることが私たちの責務だと思っています。そのためには、無理な経営をせずに、自己実現の欲求を満たし、後半の人生を有意義に過ごしたい」

サクセス社は12月、初の自主企画セミナーを開く。

「半導体を知らない人にも最新の技術を分かりやすく説明するため、話術の参考に落語を聴きに行ったり、夜ごと女房を相手に反応をうかがっています」

加藤さんは、働く喜びをこう無邪気に笑いながら、熱く語り続けた。

趣味のハワイアンバンドで余暇を楽しむ遠藤さん（左）

働くということ 2005

第2部 壁に挑む ④

六十にして立つ

技と心 頼られ輝く

「それならオレの得意分野だ。まかせてくれ」

「この技術は昔の同僚が詳しい。あいつを誘うか」

■□

神奈川県海老名市の工業団地の一角にある倉庫の一室。ノーネクタイの六十歳代の男たちが次の仕事の手配を話し合っている。

ソニーの半導体部門OBらが設立したサクセスインターナショナル。半導体関連企業が自社で解決できない課題を引き受ける「必殺仕事人」集団だ。約十人の社員が本社に集うのは週一度。自らの技を生かせる「宿題」を渡すと、それぞれの仕事の場へ散っていく。

彼らを動かすのは忘れかけていた技術者魂だ。半導体業界では多くの技術者が四十歳で実質引退となり、管理職へと進む。サクセス社取締役の遠藤勝彦（62）もそんな一人だった。

ソニー半導体部門で生産技術部長を務めた後、五十五歳で中堅企業に本部長待遇で出向する。かつて試合型しなどの設計に腕を振るった遠藤。出向先ではパソコンの表計算も使いこなせず、「こんなこともできないんですか」と部下に真顔で驚かれた。自分の技術者人生は何だったのか。やがて退社を決意する。

転機はソニーOBが集まった飲み会。「ウチの会社を手伝ってよ」。半導体関連機器会社を経営するかつての仲間の誘いに、遠藤はほかからの仕事も手がけられる会社組織での引き受けを発案。他の三人と会社設立にこぎ着けた。

今では一人月二十万～六十万円程度を稼ぐ。技術者の誇りの復活。遠藤の表情にも充実感が戻った。

日本の高度経済成長をけん引した六十歳代。ところが会社が窮地に陥ると、過剰人員の元凶のように言われ出す。報われない気持ちで定年を迎えると、人生の目的も見えなくなる。

カシオ計算機を四年前に定年退職した松尾良一（64）もそんな世代の一人。家にいてもやることがない。誘いもない。電話もかかってこない。「こんな生活が続くのか…」

"救いの神"となったのが中高年の人材活用支援の非営利法人、シニアSOHO青山サロン・三鷹（東京都三鷹市）。研修を終えると、パソコン教室の講師の仕事を紹介された。趣味程度の知識しかない松尾。「浪人はもういやだ」という

技術の「必殺仕事人」。ソニーOBが集まった（神奈川県海老名市）